

〈1〉活字文化の魅力

○県立文学館7/30 辻村深月講演「フィクションの向こう側」トークから二点

*デビュー作『冷たい校舎の時は止まる』について

三枝…ミステリーだが、むしろ青春群像小説と読んだ

辻村…青春小説と読んでくれる人も多くて意外だった。

*三枝…近年はアニメやコミックが元氣、テレビや映画の原作も多い。活字文化の後退が話題になる中でなぜ辻村さんは小説なのか、小説はどんな魅力なのか。

辻村…小説は作者だけでは成り立たない。読者が一つの文章をヒントに人物や場所、物に対する自分のイメージを引っ張り出し、想像した世界で自由に遊ぶことができる。作者と読者の共同作業ができる小説は懷の深いジャンルだ。

○小説と映画の比較

①カズオ・イシグロ『日の名残り』 主人公の執事が宿の主人に勧められる田園風景

②三島由紀夫『春の雪』

・清頭と聡子。幼馴染み、互いに恋心。聡子が宮家と婚約すると清頭の恋情が抑えがたいものになり、逢い引き。聡子は身籠もり、脳を病んだとして婚約を解消、大和の月修寺で剃髪、仏門に。一度でいいからと清頭が寺を訪れる。門前で断られ六度目のトライ。

今自分にできることは一つしかない。病が篤ければ篤いほど、病を冒して行^{ぎやう}することに、意味もあり、力もある筈だ。それほどの誠^{まこと}に聡子は感応するかもしれないし、しないかもしれない。しかし、今やたとひ聡子の感応が期待できなくても、自分に対して、そこまで行^{ぎやう}じなくては氣の済まぬところへ来てゐる。（略）

すでに五日目、六回目の訪れであるから、目をおどろかすものは何もない筈なのに、今、俥から、綿を踏むやうな覺束ない足を地へ踏み出して、熱に犯された目で見廻すと、すべてが異様にはかなく澄み切つて、毎日見慣れた景色が、今日はじめてのやうな、君のわるいほど新鮮な姿で立ち現はれた。その間も悪寒はたえず、鋭い銀の矢のやうに背筋を射た。（略）この、全くの静けさの裡の、隅々まで明晰な、そして云はん方ない悲愁を帯びた純潔な世界の中心に、その奥の奥の奥に、まぎれもなく聡子の存在が、小さな金無垢の像のやうに息をひそめてゐた。

（映画…清頭は妻夫木聡、聡子は竹内結子。映画のこの場面？）

〈2〉 詩歌の読み方（作者と読者の共同作業は短歌や俳句には不可欠）

（一） 場面の読み取り（短歌や俳句は場面の読み取りが多義的）

① 芋の露連山影を正しうす 飯田蛇笏

「里芋の葉に露が宿り、その一粒一粒に山々が影を宿している、という句」

（筑紫磐井・三省堂『名歌名句辞典』 （三枝は近景と遠景と読む）

*まず場面を読み取る（読み取り方に違いが出る）↓どちらが魅力的か議論。

*主題 山国の秋の爽やかさ

② 海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり 寺山修司

*場面 A海の広さを懸命に教えている B海へ行こうとする少女をストップ

*主題 少年の健気な恋心（これはどちらでも同じ）

（二） 短歌や俳句はエキス表現。読者は補いながら読み、鑑賞する必要。

③ 戦争が廊下の奥に立ってゐた 渡辺白泉

・動物や植物ではない戦争が立っているとはどういうことか。

・なぜ玄関ではなく、廊下の奥か

④ あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ 小野茂樹

・「数かぎりなく」と「たつた一つ」、どう読めばいいか。

・「表情をせよ」が示す心は

（三） 作品だけで読むか、背景にあるデータを重ねて読むか。

⑤ しずかなる全力ありて咲き初めるまず紅梅の二輪三輪 三枝昂之

⑥ 春の夜にわが思ふなりわかき日のからくれなゐや悲しかりける 前川佐美雄

⑦ 水漬や鼻の先だけ暮れ残る 芥川龍之介

⑧ 彼女の白い腕が／私の地平線のすべてでした マックス・ジャコブ

⑨ ああ鳥は飛べるんだった仰向けば眩しい空に涙がにじむ 黒崎由紀子

(四) 詩とはなにか、それに対するある提示

○長田弘「世界はうつくしいと」(詩集『世界はうつくしいと』から)

うつくしいものの話をしよう。／いつからだろう。ふときがつくと、

うつくしいということばを、ためらわず／口にすることを、誰もしなくなった。

そうしてわたしたちの会話は貧しくなった。

うつくしいものをうつくしいと言おう。

風の匂いはうつくしいと。溪谷の／医師を伝わってゆく流れはうつくしいと。

午後の草に落ちている雲の影はうつくしいと。

遠くの低い山並みの静けさはうつくしいと。／きらめく川辺の光はうつくしいと。

おおきな樹のある街の通りはうつくしいと。

行き交いの、なにげない挨拶はうつくしいと。

雨の日の、家々の屋根の色はうつくしいと。

太い枝を空いっぱいにひろげる／晩秋の古寺の、大銀杏おおいちようはうつくしいと。

冬がくるまえの、曇り日の、／南天の、小さな朱い実はうつくしいと。

コムラサキの、実のむらさきはうつくしいと。

過ぎてゆく季節はうつくしいと。／さりとて老いてゆく人の姿はうつくしいと。

一体、ニユースとよばれる日々の破片が、

わたしたちの歴史と言うようなものだろうか。

あざやかな毎日こそ、わたしたちの価値だ。

うつくしいものをうつくしいと言おう。／幼い猫とあそぶ一刻はうつくしいと。

シュロの枝を燃やして、灰にして、撒く。／何ひとつ永遠なんてなく、いつか

すべて塵にかえるのだから、世界はうつくしいと。

○長田弘「詩のカノン」(遺詩集『最後の詩集』から)

昔ずっと昔ずっとずっと昔、／川の音。山の端の夕暮れ。

アカマツの影。夜の静けさ。／毎日の何事も、詩だった。

坂道も、家並みも、詩だった。／晴れた日には、空に笑い声がした。

神々の笑い声は平和な詩だった。／平和というのは何であったか。

タヒラカニ、ヤハラグコト。／穏ニシテ、變ナキコト。

大日本帝国憲法が公布された／同じ明治二十二年に、

大槻文彦がみずからつくった／言海という小さな辞書に書き入れた

平和の定義。平和は詩だったのだ、／どんな季節にも田畑が詩だったように。

全うする。それが詩の本質だから、／死も、詩だった。なくなった、

そのような詩が、何処にも。／いつのことだ、つい昨日のことだ、

昔ずっと昔ずっとずっと昔のことだ。

彼女の白い腕が

私の地平線のすべてでした。

マックス・ジャコブ

恋する心をどう表現したらいいか。もつとも普遍的なテーマだから古今東西いろいろ苦心のフレーズがある。ナポリ民謡「オー・ソレミオ」では「更に美しい僕の太陽／君の瞳に輝く」。日本では「君のひとみは100000ポルト」。「あなたは私の心の王冠」といった歌詞もあったような気がする。

あまたある讚美の中のペストワンと決めたくなるのが、たった二行の掲出詩。

恋人が両腕を鳥のように広げている姿を思い描いてもいいし、ありのままの姿と読んでもいい。肝心なのは彼女を「私の地平線のすべて」と述べたところ。〈君は私の太陽〉といった表現よりもはるかにセンスがあり、思いが無限に広がる。

「すべてでした」と過去形だから、手放しの恋とは違う、取り戻すすべのない切なさを加えて一層味わし深い。

この詩、堀口大学の訳詩集『月下の一群』の中のマックス・ジャコブ「地平線」。堀口は詩、短歌、評論など幅広い活動で近現代の文学を支えたが、斬新な翻訳が与えた影響はとりわけ大きく、『月下の一群』を現代詩の生みの親と評する見解もある。

「ミラボー橋の下をセーヌ河が流れ／われ等の恋が流れる」と始まるアポリネール「ミラボー橋」、「私の耳は貝のから／海の響きをなつかしむ」のジャン・コクトー「耳」もこの訳詩集に収められている。

掲出詩に戻ると、恋する喜びと切なさを端的に示した美しい詩ではあるが、作者は悲惨な晩年の中で世を去った。

ジャコブは一八七六年生まれのユダヤ人。フランスのブルターニュに生まれ、パリに出てアポリネールやコクトーと交流を持った。詩や小説、戯曲も書き、アポリネールとともにフランス現代詩の先駆者とされる。

しかし第二次大戦時のユダヤ人排斥の動きの中でドイツ軍に逮捕され、パリ北東のドランシー収容所に送られた。ここはナチスがフランスのユダヤ人をアウシュヴィッツ収容所などに移送するための通過施設だった。

コクトーやアンドレ・マルローが助命に走り、一九一五年に改宗してカトリック詩人になったことなども添えて嘆願書をドイツ大使館に提出したが受け入れられず、収容されてからひと月も経たないうちに病死した。一九四四年四月五日のことである。この年八月には進軍してきた連合国軍がナチス占領軍との激しい戦いに勝利、パリは解放された。

ジャコブがもう少し生きていたら、彼には長く穏やかな晩年が待っていたかもしれないし、逆に、アウシュヴィッツに送られて苛酷な死を迎えたかもしれない。

戦争の狂気に翻弄された晩年だったが、詩はその悲慘を超えて今日の私たちに生きる。死の際のジャコブの眼裏に、切なくも香り高いあの青春の地平線は映つただろうか。